松田解子「産む」論
―「母性」という出発点―

岸本　加代子

はじめに

松田解子「産む」は「読売新聞」新人短編募集に入選、一九二八年六月四日号に発表された。松田解子は二〇〇四年に九九歳で生涯を終えたが、一貫してプロレタリア文学運動、民主主義文学運動に献身、活動した作家である。その初期作品である「産む」にはいくつかの論評がある。

佐藤静夫は『日本プロレタリア文学集・２２』（一九七八年一〇月　新日本出版社）のあとがきに次のように述べている。

貧と失業と弾圧のなかに生きる一人の労働者の妻が、子供を産むについての惑いにゆれる。その苦悩と、しかし産むことで知った新しい生命への感動がここに描かれている。

喜びと期待で安心して子供を産むことさえできない労働者の現実を描き、しかし「生まれろ…どんなにでも働いて育ててゆくから」、と決意する施療病院の妻と、「よろこんで生むんだぞ」と、その妻を励ましているだろう留置場の夫の胸の思いを写して、この作品は六枚という小品ながら、この作者の小説の出発を飾るにふさわしい短編といえる。

澤田章子は「苦悩する母性　松田解子「女の見た夢」など」（『民主文学』二〇〇五年四月）の中で次のような評価を与えている。

出産体験を個人のそれとして描くのではなく、労働者階級の生活苦と、「『失業者に職を！』のひとにぎりのビラ」のために三十日もの留置場生活を課せられるという圧政の時代を描いたところに、松田文学の真骨頂を見る思いである。

さらに田村栄は「松田解子論」（『民主文学』一九七五年二月）において「夫婦はきょう一日の米にも困っている。労働者である夫は、困難な運動に参加していて家に帰ることも少ない。出産の夜も夫は留置場に捕われて居る。それでも産み落とした大きな男の子を見て若い妻は叫びだしたいような幸福を感じる」と内容を紹介し、構成について次のように言及している。

作品の構成ついて言えば、胎児の処置に悩む二階間借りの主人公らの会話の背景に、下の露地から湧き上がって来るような数日前から気の狂った近所のおでん屋の親爺の「のろわしげなさけび」を配し、やり切れない重苦しさを描出しようとしている点、また、一夜をおそったすさまじい雷鳴と稲妻を「産もう」とする決意へのきっかけとして配置している点等一応巧みな創作上の計算といえよう。

これらは作品に即して具体的に論評されたものとは言い難く、抽象的ともいえるものである。また「おでん屋の親爺」のエピソード、「地球を裂き、砕こうとするかのような雷鳴」はそえものなのか。

本稿では、作品分析を通して全体像を明らかにしたうえで、社会背景も視野に入れ、松田解子の文学活動における本作の位置について考察する。

一、作品分析

「産む」は「起承転結」を明確に示しながら、展開されたドラマである。ドラマとは何かが劇的に変化することをその内実としている。では、「産む」ではいったい何がどのように変わったのか。

本文に即して考えてみたい。

まずいつの時代の出来事なのか。

冒頭の地域の情景に「耶蘇の学校」というのがあるが、「耶蘇」とは言うまでもなく、イエス・キリスト若しくはキリスト教を指し、昭和初期の頃まで用いられている。

また、主人公は「施療院」で出産する。「ふろしき包み一つでとびこんだ施療院」「まずしく、わかい母たちが、かの女の右にも左にも、赤子を抱いて、やすらかにねむっていた」とあるように、本作では貧しい人のための無料の診療施設として描くにとどまっている。

明治中期より、新聞、文学作品に「施療患者」「施療病院」などの記述が多くみられるが、近代に入って、医療、福祉、人権意識の成長とともに増えていったと思われる。

たとえば、同時期に平林たい子は「施療室にて」(『文芸戦線』一九二七年九月)を発表している。この作品は中国旅順で夫たちが企てたテロの共犯者とされた主人公「私」が執行を猶予され慈善病院で出産の後、投獄されるまでを描いている。病院の経営は行政からの補助金と「金持」によって維持されていた。院長夫妻は私腹を肥やすことを目的とした偽善者で、生まれて間もない「可憐な私の子供」も死亡したように、そこでの劣悪な医療の実態に平林は紙幅を費やし告発している。

さらに、「失業者にビラを!」のビラを所持あるいは配布したことで、警察に逮捕、拘留されている。一八九七年に「労働組合期成会」が結成されたが、一九〇〇年には治安警察法が制定され弾圧が強化された。その後、一九一七年のロシア革命の成功後、労働運動も弾圧も一層激しくなる中で作品が書かれた昭和の時代を迎えることとなった。

以上のことから作品世界を構成する時代は昭和初期と特定してよいであろう。

主人公である「かの女」は「親自体が生きられない」という貧窮の中にあり、また「私がうんと働いて」など言っていることなどから、すでに何らかの仕事をしていると考えられる。「かの女」は絶望し苦悩している状況で登場する。原因は「孕ん」でおり、しかもすでに「もう5ヵ月」だからだ。

夫である「かれ」はその事実を知って短い言葉で社会

の矛盾を告発する。

「（略）せっかく出来した自分らの子どもさえ、安心して産めないなんて・・・」

「かの女」は経済的な理由で出産することを迷っているのだ。

次に、物語は同じ貧しい人々が住む地域の一つの場面と「かの女」の思いを描き出す。それは気の狂ったおでん屋の親爺の言動と、笑いものにする群衆、そして妻が夫をかばおうと必死になる情景である。そしてその妻の姿に「かの女」は自分の将来を重ねるのである。なぜだろうか。

このことに言及した論考はない。しかし分量にして約五分の一を費やし、その後、出産を決意する直前の「かの女」の姿を示しており、重要な問いと言わざるを得ない。

おでん屋の親爺の妻と「かの女」にどんな共通したところがあるのであろうか。

「気の狂ったおでん屋の親爺」は病者であり障がい者である。おでんの購入を呼びかけ、投げつけられたマリを妄想によって「けんめいに突こうとしている」。この行動に自他に危害を及ぼす恐れはない。にもかかわらず、なぜ「巡査たち」は親爺を「引っ立ててゆこうとする」のか。

「かの女」はここに夫の姿を見たのではないか。「マリ」の中の「化け物」は資本主義社会の害悪にだぶる。群衆に嘲笑される妄想は夫の思想であったであろう。おでん屋の親爺の妻の、狂った夫への感情、今後に対する見通し、あるいは自身の人生の中での位置づけ、などについてはなにも描かれていない。ところが「かの女」は「母を呼ぶ、子どもらの泣き声」を背に、親爺を守ろうとする妻を、「不幸」だと認識している。ここで初めて、「かの女」がおでん屋の親爺の妻にだぶらせた生き方、つまり、活動家の夫と子どもを交え、家族として生きることを躊躇している姿が明らかになる。迷いの本質はここにあるのだ。「かの女」は社会に対してどのような考えをもっているのだろうか。夫の思想の理解者ではあっただ

ろうが、物語はそのことを明確に示していない。

「いくじがなさすぎるのだ」と自身を捉えつつ、「かの女」は「その夜」を迎える。

「月も星もない」空に稲妻が走り、雷鳴が鳴り響いた。その有様を「新しい世界をはじめるため」の「てってい的な破壊」のためのものと「かの女」は受け止めている。そして「かの女」は決断する。

「生まれろ、かれがいなくったって生まれてしまえ。どんなにでも働いて育ててゆくから」

決断を決定づけたのは「自分の腹壁を内部から蹴る」胎児の存在であった。いいかえれば母性の自覚と言えるだろう。

この言葉には、夫が今後も自己の思想のために捕われるようなことがあったとしても、生まれてくる子を含む家族としてともに生きていく決意が示されている。あの「不幸な妻」の生き方を選択したのだ。

そして五か月後、「かの女」の出産と心情が描かれる。

「かの女」は「ふろしき包み一つで」施療院へとびこむ。出産の時、やはり夫は捕われていた。「よろこんで、生むんだぞー」という夫の励ましを「かの女」が意識したことは、新しい家族を迎える覚悟の共有を確信した姿に他ならない。

出産後の安堵と喜びは直截な表現で読む者に感動を与える。

「かの女」は、さけぶべく、笑うべく、あまりに幸福であった。あまりに安らかな気持であった。

生活を支える経済上の不安さ、官憲との関係、地域社会とのかかわり、どれをとっても「不幸な妻」に違いない。にもかかわらず「かの女」は「叫ぶべく、笑うべく」あまりの「幸福」を実感している。母となった喜び以外の何物でもない、その一言に尽きるだろう。「安らかな気持」の中で「かの女」の視線は夫の釈放を告げる「友だちのT」へ注がれ、赤子とともに安らかに眠る出産後の若い母親たちをみまわす。妊娠を告げた産婆の声は意地悪く

聞こえたのに、出産の時の産婆の行動へのそうした思いはない。かつて、「こどもたちのさざめき」「おとなの忙しげな歩調」、さらに「自転車の警鈴」までを自分を追い詰め、敵対するかに感じた「かの女」であったが、「晴ればれと目をみひらいて」見回す視線の先には共に戦う仲間であり、同じ立場の同胞の姿があった。

物語は次のように閉じられる。

かれが、「失業者に職を！」の、ひとにぎりのビラを内ポケットにしのばせ、Tたちといっしょに家を出てから、ほぼ三十日目の暗い夜が、しだいに仄明るい菱明へと時を刻んでいった。

「暗い夜」とは正に矛盾に満ちた資本主義社会を指している。多くの失業者の存在、抗して戦う人々への弾圧という現実がそれである。夜がやがて黎明を迎えるように資本主義社会も変革されていく。その歩みをわれわれは刻むのだ。客観的な情景の描出に込められた確信と決意は「かの女」と作者のものであったろう。

二、昭和初期の思想状況

第一次世界大戦（一九一四年七月～一九一八年十一月）とロシア革命（一九一七年）はその後の世界と日本に大きな影響を与えた。

第一次世界大戦は人類が初めて経験した国家総力戦であった。各国で多くの国民が動員され、生活の場である都市が爆撃の対象となった。兵器の近代化と大量使用の結果、死傷者は約三千万人に及んだ。この悲惨な事実の前に戦後処理の議論は国際連盟を生み出したのであった。

またこの過程の中でアメリカのウイルソン大統領とロシア革命当時のレーニン政権によって提唱された民族自決権はいくつもの新興国家を誕生させることとなった。

欧米列強諸国はこうした状況の中で、軍事力ではなく、妥協、懐柔へと権益確保の方法を転換した。しかし日本は山田朗が「日本近現代史を読む」（二〇一〇年一月新日本出版社）で指摘しているように、軍事的支配を強化、次第に欧米列強との対立路線を進めていく。

この時期、国内においては、重化学工業の発展、高額現物小作料収取を内容とする地主的土地所有への反発、さらにロシア革命の影響もあり、労働者、農民の運動は活発化した。労働争議の参加人数[1]、小作争議の数[2]はそのことを明確に示している。

さて大正から昭和初期にかけての思想状況について、中村隆英は『昭和史　上』（一九九三年　東洋経済新報社）で、「当時の日本は伝統的な階層社会のおもかげを残していたが、ようやく労働運動や社会主義思想が強い勢力をもち、若い世代たちは西方から流入する新しい思想の洗礼を受けつつあった。」と指摘し、この時期の社会主義の影響を述べている。

マルクス主義的な世界像は、この時期の社会を理解するためにきわめてぴったりしたものであった。個人的な大資本家が巨額の富を蓄積する一方で、米価は上昇し、実質賃金はむしろ下落し、貧富の差が拡大して、米騒動が引き起こされるような状況の下で、若い知識人も労働運動の指導者たちもマルクス的な階級闘争の発想を素直に受け入れたことは当然のことだったといってよい。

続けて右翼思想の発展を述べたのち、次のように続ける。

左右思想の対立のなかで、もっと若い学生たちは、思想的な遍歴を経験することなくマルクス主義ないし共産主義者として育っていく。当時の大学と高等学校、専門学校では、人道主義からデモクラシーへ、さらにマルクス主義からアナーキズムへと、急激な思想の嵐が吹き荒れた。その洗礼を受けた者たちの一部が労働運動や農民運動にさらに政治的な実践に飛び込んでいったのである。

このような社会運動の激化に対して当然のことながら国家権力は激しい弾圧を加えた。他国への力による支配は国内への弾圧と表裏一体のものであった。

「大逆事件」や関東大震災の混乱に乗じた大弾圧では

多くの活動家が虐殺され、「治安警察法」「治安維持法」によって日常的に行動の制限、検挙、投獄が繰り返された。しかし、一方で活動家たちはいずれ民主主義が確立され、社会主義社会が現実のものになるという確信に満ちていた。

一九二八年二月の、普通選挙法による最初の選挙を題材にした小林多喜二「東倶知安行」(『改造』一九三〇年一二月)は、候補者島田正策の活動と主人公「私」を含めた人々の応援を生き生きと描き出している。農村で行われた演説会は盛況で明るさに満ちていた。しかし、結果は惨憺たるもので「私」たちは落胆し「べろべろに酔ってしまった」のだった。

候補者島田正策のモデルになった山本懸蔵は「北海道血戦記」(『改造』一九二八年四月)を発表、次のような一節を記している[3]。

雪の野、北海道の天地と、馬橇は、トロイカは走る。
勇を鼓して、雪の北海道に進んだが、一月二十日
までねて居た病後の身体だ　俺はからだが、かなり無理だ。
歩行困難だ。馬橇が実に身にこたえる。
だが、労働者として生まれ、労働者として育った我らは、病気や畳の上で死にたくない。　労働者、農民、無産階級の要望の下に吹雪と氷の中で戦って死ぬこそ本望である。　俺は身体の続く限り戦う。
雪の戦は　だが、実に愉快だ。
…吹雪だ。大雪だ。汽車は止まる。だが無産階級の要求は止まらない。馬橇で、トロイカで、敵の本陣に進むのだ。

当時の活動家たちは、運動の高揚と弾圧に一喜一憂しながらも、意義に確信を持ち、目前の課題に取り組んでいたのでないだろうか。

その後一九三一年に始められた中国東北部への侵略戦争の国内的準備ともいえる社会主義を志向する労働・社会運動への大弾圧によって、活動家たちの前進は潰されたとも云える時代を経ることになる。しかし、山本懸蔵の言うように「無産階級の要求は止まら」なかった。日

本帝国主義による第二次世界大戦は、日本政府のポツダム宣言受諾により終結し、弾圧され、抹殺された者たちこそ社会進歩の側にあったことが証明された。

まとめ

松田解子は一九〇五年に現秋田県大仙市にある三菱経営の荒川鉱山で生まれ、その鉱夫長屋で成長した。鉱脈豊かな鉱山の繁栄が労働者への搾取と虐待、過酷な待遇のもとにあったことを身をもって体験し、大正デモクラシー、社会主義思想の高揚のなかで青年期を過ごしている。そして自立をめざして上京すると「労働組合」「大杉栄」など知った名を訪ね歩いた。その足跡から「産む」執筆前の松田は社会変革の運動への憧れや漠然とした確信はあったものの、現実に困難が突き付けられた時、動揺もする、そうした状況だったと思われる。

「産む」は妊娠、出産への対応に直面し、母性の力を借りて自己の生き方を確立した女性の物語である。主人公に固有名詞が与えられず、「かの女」とされ、夫も「かれ」と表現されているのは、階級的普遍性を主張しているのではないだろうか。

その後、松田解子は「三・一五事件」で連行された。渡邊澄子『気骨の作家　松田解子百年の軌跡』（二〇一四年十一月　秋田魁新報社）によれば、この時、生後七十五日の長男を背負っていたことから「ガキなんかしょって、ガキなんかこしらえて、この運動できると思っているのか」と怒鳴られたことに、反発、「ガキしょってでもこういう世の中は変えなければならない」と「決意を固めた」とされている。

女性、母性の視点は松田の文学の重要な柱の一つといえるだろう。

〈注〉

（1）安田浩は「社会運動の様相　二　労働運動の展開」（『講座日本歴史9近代3』歴史学研究会・日本史研究会編集、東京大学出版会、一九八五年七月一七六、一七七頁）において「一九二〇年以降、有利な労働市場条件・物価の上昇という、第一局面の

争議の基礎条件は失われたにもかかわらず、争議の波は収まらなかった。二一・二三年と激しい労働争議があいつぐ。」と述べ、『日本労働運動史料』第一〇巻より作成した「表2産業別ストライキ一件平均参加人員（一九一七～一九二二）」を掲載している。それによると一九一七年には一四四人だった参加人員が一九二一年には二三六・七人と上昇している。

（2）林宥一は「社会運動の様相　三農民運動の展開」（『講座日本歴史9近代3』歴史学研究会・日本史研究会編集、東京大学出版会、一九八五年七月一九三～一九五頁）において「高額現物小作料収取を主要な内容とする地主的土地所有は、最終的には農地改革によって廃絶されたが、改革への胎動は、第一次大戦期とその直後にかけて始まった」とし、農林省農務局『昭和三年小作年報』付録による「表五初期小作争議件数」を掲載している。それによると、一九一七年に全国で八五件だった小作件数は一九二三年には一九一七件へと増加している。

（3）引用文中、空白は言文のまま。